秋思（張籍）
しゅうし ちようせき

洛陽 城裏 秋風を見る
らくよう じょうり しゅうふう

家書を作らんと欲して 意万重
かしょをつく ほつ いばんちよう

復恐る 匆匆 説き 尽くさざるを
また おそ そうそう と つかさざるを

行人 発するに 臨んで 又封を開く
こうじん はつ のぞ またふう ひらく

洛陽城裏見秋風 欲作家書意萬重
復恐匆匆説不盡 行人臨發又開封

解説 故郷への手紙を書くことによつて望郷の思いを詠った詩である。

語釈 ※洛陽Ⅱ唐の東都。 ※見秋風Ⅱ西晋の張翰の故事。張翰は洛陽で官仕えをしていたが、ある年のこと秋風が吹きはじめたのを見て、故郷の呉を思い出して、官職をすてて郷里に帰った。 ※家書Ⅱ家への手紙。 ※意Ⅱこころ。

※万重Ⅱ思いがあれやこれやと重なること。 ※匆匆Ⅱあわただしいこと。 ※説不盡Ⅱいい残しがある。 ※有人Ⅱ手紙を托すべき旅人をいう。

通釈 洛陽に逗留する内に、いつか秋風が吹き始め、木々の葉を翻す様子が見える。郷里が恋しくなり、家への手紙を書こうと思うが、積もる思いがあれこれ湧き起る。慌てて書いたので、いい残しはないかと又気がかりになって、ことづけをする旅人が出發するとき、もう一度封を開いて見直した。